

主 題：自分の罪の中で死にますか？

聖書箇所：ヨハネの福音書 8章21－20節

この朝、続けて見ていきたいのは、ヨハネの福音書8章のみことばです。きょうは特に8：21－30の内容を一緒に考えてみたいと思います。

ヨハネ8：21－30

「：21 イエスはまた彼らに言われた。「わたしは去って行きます。あなたがたはわたしを捜すけれども、自分の罪の中で死にます。わたしが行く所に、あなたがたは来ることができません。」：22 そこで、ユダヤ人たちは言った。「あの人は『わたしが行く所に、あなたがたは来ることができない』と言うが、自殺するつもりなのか。」：23 それでイエスは彼らに言われた。「あなたがたが来たのは下からであり、わたしが来たのは上からです。あなたがたはこの世の者であり、わたしはこの世の者ではありません。」：24 それでわたしは、あなたがたが自分の罪の中で死ぬと、あなたがたに言ったのです。もしあなたがたが、わたしのことを信じなければ、あなたがたは自分の罪の中で死ぬのです。」：25 そこで、彼らはイエスに言った。「あなたはだれですか。」イエスは言われた。「それは初めからわたしがあなたがたに話そうとしていることです。」：26 わたしには、あなたがたについて言うべきこと、さばくべきことがたくさんあります。しかし、わたしを遣わした方は真実であって、わたしはその方から聞いたことをそのまま世に告げるのです。」：27 彼らは、イエスが父のことを語っておられたことを悟らなかった。」：28 イエスは言われた。「あなたがたが人の子を上げてしまうと、その時、あなたがたは、わたしが何であるか、また、わたしがわたし自身からは何事もせず、ただ父がわたしに教えられたとおりに、これらのことを話していることを、知るようになります。」：29 わたしを遣わした方はわたしとともにおられます。わたしをひとり残されることはありません。わたしがいつも、そのみこころにかなうことを行うからです。」：30 イエスがこれらのことを話しておられると、多くの者がイエスを信じた。」

さて、きょうの内容に入る前に、これまでの大きな流れを少し思い出してみてください。父なる神様から遣わされてきたイエス様は、いつも自分がだれなのかということの人々の前で明らかにしていました。ことばを通して、また奇跡を通して、イエス様はご自分こそがまことの神様であること、ご自分こそが人に救いを与えることのできる約束の救い主であることを語り続けていました。たとえばすでに見た6章のところでは、イエス様は五つのパンと2匹の魚で大勢の群衆を養われました。ご自分が人々の魂、霊的な空腹を満足させることのできる唯一の救い主、いのちのパンであることを彼らに明らかに示すためでした。続く7章では、イエス様は仮庵の祭りに現れ、かつて荒野で神様が水をもって民を守り導いてくださったことを思い出す儀式をしている時、「だれでも渴いているならわたしのもとに来なさい」と叫ばれました。ご自分が人々の魂、霊的な渇きを潤すことのできる唯一の救い主であることを彼らに明らかにするためでした。また、この8章では、同じ仮庵の祭りで神様の臨在や守りを表す光を思い出す儀式をしている時、「わたしは世の光です」と人々の前で叫ばれていました。それも同じです。ご自分こそが人々の暗い罪に汚れた心を照らす唯一の救い主であるということを経験した人々の前で明らかにするためでした。

その訴えは最初から変わらず明白でした。しかし残念ながら、すべての人がこの方を素直に信じ受け入れたわけではありません。むしろ多くの者たちがこの方を憎むことになりました。あわれみをもって差し出されたその救いの御手を、多くの者たちが自らの意思でかたくなに拒んだのです。だからこそ、そんな彼らに対して、イエス様は厳しい警告を与えられました。ご自分のことを拒み続けていることには、今だけではなく死んだ後にも大きな結果が伴うことを、イエス様は大きな愛のゆえにはっきりと示されたのです。それが今回私たちが見ていこうとしている箇所の教えている内容でした。

私たちはみんなよく知っています。ここにいる人、例外はひとりもいません。私たちはいつの日か必ずこの世での最後の日、死を迎えます。その死の迎え方は人それぞれです。思いもしなかった若い時に突然死を迎える人もいます。年を経て、眠るように死を迎える人もいれば、病気にかかって死を迎える人もいます。昨日、教会でも召天記念式を持ちましたけれども、死というのは現実の問題としてそれぞれ私たちを待っているのです。そしてそのやって来る死を迎えるに当たって、私たちにはみなひとりひとり問われることがあります。世の光であるイエス・キリストを拒んでその死を迎えるか、それともこの方を信じて死を迎えるか、そのどちらかです。あなたはきょうそのどちらの道に立って歩んでいるでしょう。改めて自分自身のこととして、イエス様が与えられていた警告とその中に示されているすばらしい希望に、きょうは一緒に目を留めてみましょう。

○ “世の光” を拒む者たち：待ち受ける三つの現実

特に今回の箇所には、世の光を拒む者に待っている三つの厳しい現実が描かれています。いったいどんなものだったのか早速順番に見てみましょう。

1. 自分の罪の中で死ぬ 21-22節

まず一つ目の現実からです。世の光を拒む者に待っている一つ目の現実は、自分の罪の中で死ぬということです。もう一度21節を見てください。イエス様はこんな警告を与えていました。「イエスはまた彼らに言われた。「わたしは去って行きます。あなたがたはわたしを捜すけれども、自分の罪の中で死にます。わたしが行く所に、あなたがたは来ることができません。」」とあります。イエス様が言わんとしたのは、とてもシンプルなことでした。約束の救い主としてこの地上に来られたイエス様は、しばらくの間は地上にいても、いつまでもこの世にいるのではなくて、目的を果たせば再び本当の住まい、自分を遣わせた父なる神がいる天へと去っていくことを繰り返し訴えられていたのです。イエス様は、ご自分がどこから来たのか、またどこへ行くのかということをご存じのお方でした。でもこの発言を聞いた人たちは、何を言われているのか全く理解できませんでした。いやもっと言えば、世の光を拒むそのかたくなな心は、このことばをあざ笑い、いっさい傾けよ耳をうとしませませんでした。

続きを見てください。このことばを聞いた彼らの態度がこんなふうに描かれています。22節「そこで、ユダヤ人たちは言った。「あの人は『わたしが行く所に、あなたがたは来ることができない』と言うが、自殺するつもりなのか。」」と。単純に「自殺するつもりなのか」と読むと、なにか彼らが不思議さを覚えて質問しているかのように思えるかもしれませんが。ですがこれは質問ではありませんでした。この当時、ユダヤ人の伝統によると、自殺する者というのは永遠のいのちを手にすることができず、地獄の中でも最もひどい場所に送られると信じられていました。1世紀に活躍したユダヤ人の歴史家ヨセフスという人物もこの当時のこの考え方を次のように著書の中で記していました。「自らに対して狂気の手を下した者たちの魂は、ハデスの最も暗い場所に受け入れられる。」と。ですから、この場に集まっていた者たちに対して、「あなたは死んだ後どこに行きますか」と尋ねれば、間違いなく彼らは「私は天国に行きます」と、確信を持って答えていたでしょう。特に民の指導者たち、パリサイ人は自分たちこそ天にいる神様と正しい関係を持っていると信じて疑うことのない人物たちでした。そしてそんな彼らが「わたしは去って行きます」、「わたしが行く所に、あなたがたは来ることができません」というイエス様のことばを聞きました。彼らは思うのです、「ああ、この人はおそらく自殺するんでしょう」、「そうやって自ら地獄の一番深いところに落ちていくんでしょう」と。自分がそんな場所に行こうとしてるから、天に行く私たちがそんな方についていくことはできないと言っているのでしょうかと。でも私たちは、絶対そんなところに行くつもりはありませんよと。人々はこの場でイエス様のことばを聞いて、単純に首をかじげたわけではありません。彼らはイエス様のことばを拒みました。そのことばを発したイエス様のことをばかにしたのです。

本来であれば、この方を通してでしか天にいる父なる神様を知る術はないのに、本来ならこの方を通してでしか天へと繋がる道はないのに、彼らはその唯一の救い主を自らかたくなに拒絶したのです。あ

の人は自殺でもするつもりなのですかと。そしてある意味皮肉だと思いませんか？この後イエス様は、確かにご自分のいのちを捨てられるのです。悪口を浴びせられて、友の裏切りにあい、多くの迫害を受けた結果、絶望したからいのちを捨てるのではありません。救い主イエス様は、罪人に救いを与えるため、罪人の身代わりとなるため、十字架の上で自らのいのちを捨てられました。だれかから強制されたのではありません。同じヨハネの中でもはっきりとイエス様が言われてました。ヨハネ10:18でイエス様は言われていました。「だれも、わたしからいのちを取った者はいません。わたしが自分からいのちを捨てるのです。わたしには、それを捨てる権威があり、それをもう一度得る権威があります。わたしはこの命令をわたしの父から受けたのです。」だ」と。確かにこの方は天から来た罪に汚れた暗い心を照らす世の光でした。罪人を救うため、ご自分のいのちを喜んで捨てられたあわれみ深い救い主でした。そこにいた者たちは、イエス様がだれなのかということは何もわかっていませんでした。自分たちこそ天国に行くと思込んでいた彼らは、目の前にいるイエス様が滅びへと向かっていると思いました。でも実際は、自分たちこそが滅びに向かって進んでいた者たちだったのです。

もしあわれみ深いお方を求められる時に求めず、かたくなに拒み続けているのであれば、そんな者たちには一つの現実が待っています。その者は自分自身の罪の中で死ぬということです。聖書注解者のひとりウィリアム・ヘンドリックセンもその悲劇的な現実について次のようなことばを残しました。「彼らはその死において、いかなる慰めも平安も経験することはなく、ただ暗い絶望だけを味わう。彼らが拒んだお方は、彼らが助けを必要とする時に傍におられない。彼らは自分たちの罪の中で死ぬのである。神の怒りがその上にとどまり、永遠の滅びへと向かっていく。イエスが行かれる所、すなわち父のみもとに彼らは行くことができない。」と。自分の罪の中で死ぬ、それが光を拒絶し続ける者に待っている最初の悲しい現実でした。

2. 神様から永遠に引き離される 23-24節

次に二つ目の現実です。世の光を拒む者に待っている二つ目の現実は、神様から永遠に引き離されるということです。続く23-24節でイエス様はさらにこんな警告を与えています。「:23 それでイエスは彼らに言われた。「あなたがたが来たのは下からであり、わたしが来たのは上からです。あなたがたはこの世の者であり、わたしはこの世の者ではありません。:24 それでわたしは、あなたがたが自分の罪の中で死ぬと、あなたがたに言ったのです。もしあなたがたが、わたしのことを信じなければ、あなたがたは自分の罪の中で死ぬのです。」と。イエス様はここでご自分と人々との違いについて明白に示されていました。ご自分とご自分を拒み続けるその罪人の間には根本的な違いがあると、線引きされていました。簡潔に言うのであれば、それはそれぞれの起源、住む世界の違いでした。二つは同じ場所の出身でも、同じ場所に属する者ではなかったのです。人々が来たのは「下から」であり、イエス様が来られたのは「上から」でした。人々はこの世に属する者であり、イエス様はこの世ではなく天に属する者でした。二つのものは全然違う、そしてこれは何も真新しい教えではありません。この真理についてもイエス様はこれまでももう何度も何度も語られ続けてきました。

たとえばヨハネ3:13で、ご自分の元を訪ねて来たパリサイ人ニコデモに対して、イエス様はこう言われていました。「だれも天に上った者はいません。しかし天から下った者はいます。すなわち人の子です。」と。またもう少し進んで6:33でもそのことが何度も繰り返されていました。イエス様は人々に言うのです、「というのは、神のパンは、天から下って来て、世にいのちを与えるものだからです。」と。38節では「わたしが天から下って来たのは、自分のこころを行うためではなく、わたしを遣わした方のみこころを行うためです。」、50-51節にはこう書いています。「:50 しかし、これは天から下って来たパンで、それを食べると死ぬことがないのです。:51 わたしは、天から下って来た生けるパンです。」と。最後に、57-58節にもこう書いてました。「:57 生ける父がわたしを遣わし、わたしが父によって生きているように、わたしを食べる者も、わたしによって生きるのです。:58 これは天から下って来たパンです。」と。イエス様の主張というのは、初め

から何も変わっていないということがわかります。この方はもともとこの世の出身ではありませんでした。この方は下から来たのではなく、上から、天から遣わされて来た約束の救い主でした。でもその一方で、罪人たちはみな下から来た、「この世の者」でした。

「この世の者」というのは、いったいどういう意味でしょう。「この世の者」というのは、単純にこの地上、この地球に住んでいる人たちのことを言うものではありません。ここで使われている「世」ということばは、神様に逆らう、墮落したサタンの支配下にある世界のことを表しました。光よりもやみを愛し、真理よりも偽りを求め、ありとあらゆる部分に罪が満ち溢れたもの、それが神様に敵対している「この世」というものでした。別のみことばもその姿を描いています。Ⅰヨハネ5：19に「私たちは神からの者であり、世全体は悪い者の支配下にあることを知っています。」と書いてあります。世はすべて悪いものの支配下にありますと。またヤコブもこんなことばを残しています。ヤコブ4：4に「貞操のない人たち。世を愛することは神に敵することであることがわからないのですか。世の友になりたいと思ったら、その人は自分を神の敵としているのです。」と書いています。みことばが教えていることは明白でした。中間地点はないということです。罪を持って生まれてくる罪人は、皆例外なく、生まれながらに、「この世の者」でした。ここにいる私たちひとりひとりもみな「この世の者」です。すべての人が悪い者、サタンの支配下にある神様を憎む世に属する者でした。私たちはみな元からそんな存在だということです。

改めてちょっと考えてみてください。罪がもたらした問題というのは何だったでしょう。最初の人間アダムによってもたらされた罪は、確かにこの世に悪をはびこらせました。罪によって争いや憎しみが生まれ、罪によって病気や災害が起こり、罪によって死がこの世に入りました。どれを取ったとしても、それらはすべて大きな問題です。でも何よりも大きな問題は、罪は私たちと神様との関係を壊しました。罪は神様との間に断絶というものをもたらすものでした。それが罪の性質でした。イザヤ59：2でイザヤもこんなふう言うのです。「あなたがたの咎が、あなたがたと、あなたがたの神との仕切りとなり、あなたがたの罪が御顔を隠させ、聞いてくださらないようにしたのだ。」と。罪は神様との仕切りとなるものでした。また、マルティン・ルターも罪に関して、「罪とは本質的に神からの離反である。」と言います。罪というのは、神様から離れることでした。これはよく知っています。油と水は、どれだけ混ぜても混ざり合うことはありません。光とやみも混ざり合うことはありません。同じように、罪に汚れている神様を憎んでいる世と神様のおられる天は混ざり合うことは決してありませんでした。

だからこそ世に属している罪人がどれだけ良い行いをしたとしても、何の意味もなさなかつたのです。神様に敵対する者たちが神様に受け入れられるのに必要なのは、人の努力や善行ではありませんでした。ただ神様の前にへりくだり、神様にあって新しく造り変えられること、新しく生まれることが不可欠だったので。イエス様は自分の元にやって来た、人間的に見れば、だれからも尊敬されるような立派なニコデモに対して、開口一番こんなことを言いました。ヨハネ3：3「イエスは答えて言われた。「まことに、まことに、あなたに告げます。人は、新しく生まれなければ、」と。原文そのままに訳するのであれば、「上から生まれなければ、神の国を見ることはできません」と。つまり聖書が描いている姿は、世に属する者である限り、だれも神の国に行くことはできないということです。また世にあるもの、世に属する者には、その状況を自分で変えることは何もできませんでした。この世に生まれた私たちはみなひとりひとりその世にあって、文字どおり無力のまま、永遠に神様から遠く離され、自分の罪の中で死ぬしかなかったのです。生まれたところが違いました。私たちにできたことは何もありませんでした。

でも感謝なことに、ここに希望があるのです。地からではなく、下からではなく、天から来られたイエス様が、私たちの代わりに十字架にかかって、救いの道を用意してくださいました。天から来られたイエス様が、その方を信じる信仰を通して、その世から助け出すというその救いの希望を与えてくださったのです。もう一度イエス様のことばを見てください。8：24の後半部分で特にこう言っていました。「それで私はあなた方が自分の罪の中で死ぬとあなた方に言ったのです。「もしあなたがたが、わたしのことを

信じなければ、あなたがたは自分の罪の中で死ぬのです。」と。このことばはすごいと思いませんか？イエス様はご自分のことをあざ笑い、自殺でもするんですかとばかりにしていた者たちと話していました。でもそのような者に対しても、イエス様は警告と一緒に救いの手も差し伸べていたのです。もしあなた方がこのまま私のことを信じなければ自分の罪の中で死ぬことになります、だからわたしのことを信じなさいと。この世に罪を持って、この世に属する者として生まれてきたその罪人にとって、残されている唯一の道はイエス・キリストを信じることだけでした。ただし信じるというのは、自分の信じたいことを信じるという話ではありません。ここでイエス様は言われていました。「わたしのことを信じなければ」と。これを原文どおりに読むとすれば、この部分は「わたしがわたしであることを信じなければ」と読むこともできました。この表現は、燃える芝の中からモーセに語られて、神様が明らかにされたご自身の名前でした。この名前は聖書のいろいろなところにも出てきます。たとえば別の箇所でもこんな風に書かれていました。イザヤ45:18にもこんなふうに出てきました。「天を創造した方、すなわち神、地を形造り、これを仕上げた方、すなわちこれを堅く立てた方、これを荒漠としたものに創造せず、人の住みかにこれを形造った方、まことに、この【主】がこう仰せられる。「わたしが【主】である。ほかにはいない。」と。ですからここでイエス様が求めていたことは明白でした。イエス様はご自分こそが唯一まことの神であるということ、ご自分こそが天を造り、地を形造り、そしてそれを堅く立てた永遠の神であることを信じるようにと求めました。

自分の救いに関して何もできない無力な罪人が、主であるイエス様の前にただへりくだってこの方のすべてを素直に受け入れるようにと求めたのです。そして感謝なことに、そんなイエス様を信じる信仰のうちに罪を赦され、そして神様にあって全く新しいものへと造り変えられるというそんな大きな喜びが約束されていました。あなた方は信じなければ死にます。でも信じるのであれば、その罪の中で死ぬことはありませんと。イエス様を信じる者は罪の中で死ぬことはもうありませんでした。イエス様を信じる者はそのイエス様にあって、遠く離れ、関係が断絶した神様とともにいることができました。

みことばはこんなすばらしい約束も教えてくれています。I ペテロ3:18にイエス様がなぜ来たのか、イエス様は何を成し遂げたのか、こう書いています。「キリストも一度罪のために死なれました。正しい方が悪い人々の身代わりとなったのです。それは、肉においては死に渡され、霊においては生かされて、私たちが神のみもとに導くためでした。」と。この世に属する下から来た罪人には絶対にできないことを上から来たお方が成し遂げてくださいました。天から来られたそのお方が私たちの罪を背負い、代わりに十字架にかかって死なれました。そしてその救い主はその大きな犠牲を通して、ご自分を信じる者と神様との間に平和を、和解をもたらしてくださったのです。イエス様は世に属していて、自分たちでは何もできないそんな私たちを、真っ暗な罪人だった私たちを、神様のみもとへと連れて行ってくださると。それが来てくださった世の光である救い主でした。

だからこそもしまだこの中にこのすばらしい救い主を自分の主として、救い主として信じていないという方がいるのであれば、どうかその罪を悔い改めて、そしてきょう自分の救い主として素直に信じ受け入れてください。自分の罪の中で死なないでください。神様に永遠に引き離されて死なないでください。神様とともに生きる喜びをきょう知ってください。もう信じていると言われる皆さん、それであるなら私たちは最高の喜びを今持っているはずです。思い出してください。イエス様を信じる以前は、生まれながらに私たちはみなこの世に属する者でした。だからこそ私たちは世が考えるように考えて、世が話すように話し、世が求めるように自分の願いや満足を求めてきました。この世は自分を喜ばせることを求めるものでした。だから私たちも自分の喜びや満足を求めることを何よりも優先してきました。その結果、私たちは神様を悲しませ、多くの人をも悲しませてきたのです。でもイエス様を信じ、救われた私たちは、その世からもう助け出されているということです。もうその世に縛られる必要はないということです。

イエス様はこんなことも弟子たちに向かって言われました。同じヨハネ17:14-16でご自分の弟子がどんな存在なのか、またご自分の弟子のためにイエス様はこんな祈りをしました。「:14 わたしは彼らにあなたのみことばを与えました。しかし、世は彼らを憎みました。わたしがこの世のものでないように、彼らもこの世のものでないからです。:15 彼らをこの世から取り去ってくださるようというのではなく、悪い者から守ってくださるようお願いします。:16 わたしがこの世のものでないように、彼らもこの世のものではありません。」と。イエス・キリストを信じ救われた者は、もう「この世の者」ではありません。もちろん肉体的にはまだこの世に生きている以上、いろいろな悪や汚れとの戦いはあります。悪いものの誘惑というものも絶えずあります。でも私たちは、以前と同じような無力な者として生きていく必要はありません。なぜかというと、罪や死、悪いものに勝利されたイエス様のうちに入れられて、イエス様とともに、この世ではなく天に国籍を置く者として生きていくことが、今はもうできるからです。果たしてこの事実を本当に自分自身、自分のこととして信じているのでしょうか。信じているのであれば、それにふさわしい者として生きているのでしょうか。以前は「この世の者」だったので、私たちはこの世のことを一番に考え続けました。一日の生活の中にあって、この世のことばかりを考えてきたのです。でも救われた者は、この世は仮の住まいでしかありません。聖書は、私たちはただ寄留者に過ぎませんと繰り返し言っていました。天に住まいを置く者として過ぎ去っていく者にしか過ぎませんと。だとすれば、過ぎ去っていくことに常に時間を費やしているのでしょうか。それとも天のことを考えることにどれだけ時間を費やしているのでしょうか。以前と何も変わらず、以前の世のことを恋しく思うような生き方をしていないのでしょうか。感謝なことに、世の光を信じる者はもう世のためには生きてはいません。世を愛する者としても生きてはいません。真っ暗なやみの罪の中、ただ死ぬ定めだった、ただ永遠に引き離されるそんな定めだった私たちを助け出してくださった神様、その救い主を愛する者として生きていくことができます。その希望が私たちにはあります。でももしその希望をもたらしてくれる世の光というものを、まだかたくなに拒み続けるのであれば、そこには一つの現実しか残されていません。そんな者は自分の罪の中で死に、そして永遠に神様から引き離されるということです。それが二つ目の悲しい現実でした。

3. 心がさらにかたくなになる 25-30節

そして最後に、世の光を拒む者に待っている三つ目の現実は、心がさらにかたくなになるということです。自分をあざ笑うような者に対しても、イエス様はあわれみを示そうとしました。救いの御手を差し伸べようとしていました。でもそんなイエス様に対して、人々が取った応答がこう続いています。25節の最初に、彼らはどんなふうに応答したかが書いてありました。「そこで、彼らはイエスに言った。「あなたはだれですか。」」と。この「あなたはだれですか」という問いは、単なる質問ではありません。このことばにもともと込められている意味というのは、「お前はいったいだれなのか」、「いったい何様のつもりでそんなことを言っているのか」というものでした。「そんなことばを発しているあなたはいったい何様のつもりですか」と。悲劇的なことに、彼らの心はあまりにも盲目でした。彼らはあわれみをもって差し出されたその救いの御手を拒むばかりではありません、それを軽蔑しました。イエス様のことばに一向に耳を傾けようとせず、そのことばを嘲笑しました。

しかし、それはなぜなのでしょう。なぜ彼らはここまでかたくなだった原因は何でしょう。知識や情報が足りなかったからでしょうか。イエス様の教えがあまりにも複雑だったからでしょうか。いいえ、そうではありません。それは彼らの心の高慢さのゆえでした。彼らの心のプライドのゆえでした。彼らは何度も何度も何度もイエス様のことばを耳にしました。イエス様が教えていたことばは最初からずっと変わりませんでした。自分は父から遣わされた者として、その方から聞いたことを語っているにすぎませんと、イエス様は訴え続けていました。この場面も同じです。25節後半からイエス様はこう言うのです。「イエスは言われた。「それは初めからわたしがあなたがたに話そうとしていることです。:26 わたしには、あなたがたについて言うべきこと、さばくべきことがたくさんあります。しかし、わたしを遣わした方は真実であ

って、わたしはその方から聞いたことをそのまま世に告げるのです。」と。イエス様はどんな場面にあったとしても、ご自分の正体をごまかそうとはしませんでした。初めから大胆に伝えようとしていました。でもそれでも聞く耳を持たない高慢な心は、真理が語られるたびにその心をかたくなにしたのです。27節でも続いています。「彼らは、イエスが父のことを語っておられたことを悟らなかった。」と。世の光を信じない人たちの問題は、どの時代においても同じです。知識や情報の足りなさではありません。証拠の足りなさでもありません。仮にそのような人たちが驚くほどの奇跡を目の当たりにしたとしても、信じることにつながるのではありません。不信仰の問題は、聖く正しい完全な神様の前に、罪人の自分が何者かであると思ひ込む、その高慢さにありました。高慢な者は耳を傾けようとしません。考えてみてください。当時この場にいた人々、特にユダヤ人の指導者たちは、すべて模範になるような神様にも熱心だった彼らは、間違いなく自分たちこそ天国に行くと思ひ込んでいました。他の人はどうであったとしても、自分たちが神様のあわれみを必要とする罪人だとは思わなかったのです。そうやってへりくだることをしませんでした。そしてへりくだることのない心を持っていたからこそ、彼らは世の光を目の前にしていても、それに素直に耳を傾けようとせず、かたくなに拒み、そしてその結果、罪の中で死んでいったのです。忘れてはいけません。高慢さ、プライド、それはどの時代も非常に危険な結果をもたらします。

なぜプライドが、高慢さが問題になるのでしょうか。なぜ聖書は高慢さを危険なものとして警告し続けているのでしょうか。それは、高慢さというものが私たちのうちから神様のことを忘れさせるからです。申命記でも言われていました。申命記8：14にこう書いています。「あなたの心が高ぶり、あなたの神、【主】を忘れる、そういうことがないように。」と。高慢になっている時、私たちは神様の姿を忘れます。人が神様の姿を忘れたらどうなるのかというと、その人は神様に対する愛を忘れ、そして本来何者でもない自分を何者かであるように錯覚するようになります。神様の前に自分たちを正しく見るのであれば、私たちは何者でもない罪人なのに、神様を忘れると、自分たちが何者であるかのように思ひ込もうとするのです。そしてその高慢さは、どんな時代も、どんな時も、人を神様や天から遠ざけるものでした。だから神様はいつも警告していたのです。1ペテロ5：5でも述べられていました。「……みな互いに謙遜を身に着けなさい。神は高ぶる者に敵対し、へりくだる者に恵みを与えられるからです。」と。世の光を前にして、そのことばを聞いていた高慢な人たちは、真理を素直に受け入れようとはしませんでした。

では、そんな高慢で盲目的な彼らに対して、イエス様はどのように応答されたか、続きを見てください。28-29節にこのように記されています。「：28 イエスは言われた。「あなたがたが人の子を上げてしまうと、その時、あなたがたは、わたしが何であるか、また、わたしがわたし自身からは何事もせず、ただ父がわたしに教えられたとおりに、これらのことを話していることを、知るようになります。：29 わたしを遣わした方はわたしとともにおられます。わたしをひとり残されることはありません。わたしがいつも、そのみこころにかなうことを行うからです。」と。皮肉にも人々がイエス様を恥ずかしめる目的でつけるその十字架が、その逆にイエス様の神の御子としての力や栄誉、偉大さを大いに明らかにする、最も栄光の時になると言うのです。十字架は、イエス・キリストがだれなのかということ、大いに明らかにするものでした。そして実際そのように認めた者もいました。十字架にかかるイエス様の姿を見ていた当時の百人隊長も、こう口にしました。マルコ15：39で「この方はまことに神の子であった」と言いました。ある者は気づきました。それでも多くの者が十字架を前にしてもイエス様のことを認めず、かたくなな心のまま逆らい続けたということです。彼らが最も必要としていたその救い主は、彼らの目の前にいました。しかし高慢だった彼らは、その方を自分自身に必要な方として受け入れることをせず、そしてその結果、自分の罪の中で死んでいきました。

あまりにも悲しい悲劇的な現実だと思いませんか？以前こんな話がありました。糖尿病治療のためのインスリン開発を先導したゴードン・アレスという人がいました。この人物はこの研究で名を馳せていた有名な博士でした。しかしそんな彼がある時突然亡くなるのです。死因は糖尿病でした。その病気を専門

とし、その治療薬まで研究していた人物がその病で亡くなっていったのです。彼自身に必要な薬はそばにありました。でもそれを自分自身に用いることはなかったのです。残念なことに、これと同じことは私たちの周りでも起こっています。実際の病気の話ではありません。生まれながらにすべての人が抱えている罪の病の話です。すべての罪人が必要としている救い主、その罪の病を癒すことのできるイエス・キリストはいても、多くの方がいまだにこの方信じ受け入れようとしていません。たくさんの方が今も日々心をかたくなにし、自分の罪の中で死に、永遠に神様から引き離されるその日に向かって一歩一歩足を進めています。厳しいことばかもしれませんが、でもイエス様のことばと一緒によく考えてください。あなた自身が今、イエス様を信じていないのであれば、あなたはいつか自分の罪の中で死にます。あなたの家族、両親や伴侶、兄弟や子ども、孫。今イエス様を信じていないのであれば、彼らはいつか自分の罪の中で死にます。あなたの周りにいるどんな人であったとしても、その人がイエス様を今信じていないのであれば、彼らはいつか自分の罪の中で死にます。永遠に神様から引き離されるその地獄は、空想のものではありません。現実のものとして存在しています。だとすれば、そんな彼らのために私たちには何ができるでしょう。私たちが彼らのことを本当に愛しているのであれば、私たちは伝えることができます。どうか自分の罪の中で死なないでくださいと。彼らを唯一その罪から救い出すことのできるイエス様をどうか信じてくださいと訴えることができます。罪の問題は確かに現実の問題として存在しています。でも同時に、その罪の問題から私たちを救い出すために世の光は来てくださいました。この世に生まれた私たちには何もできなかったその問題を、天から来られた御子が解決してくださいました。天から来た神の御子がどうしようもないこの世の罪人のためにいのちを捨てて、そしてそのことを通して神様の愛を私たちに示してくださいました。

きょうの箇所にかかれていた現実、本来であれば私たちもみな直面する現実でした。それでも神様が恵みによって、この主の犠牲を通して、信じる者に罪の赦しを、永遠のいのちを約束してくださったのです。それが私たちの持っている喜びです。だとすれば、私たちはこんな救い主を拒むのではなく、この主を感謝する者として生きていくことです。この主とともに歩む時、私たちはもう自分の罪の中で死ぬ必要はありません。この主とともに歩む時、神様のいる天でいつまでもともにいることができるというその希望を持って生きていくことができます。その希望を与えてくださったお方こそ、天から来られた世の光でした。その方を愛する者として、その方を礼拝する者として今週もともに歩いていきましょう。